

スペース的

ストック

の活かし方

住民の愛着が「まちの宝」を生む

～公園はみんなの遊びの基地、防潮壁はみんなのキャンパスだ～

石田 富男

まちの宝というと何か特別なものを頭に描く人がいるかもしれない。自然にも恵まれていない、とりたてて特筆するような歴史もない自分のまちには、まちの宝なんてない…。果たしてそうだろうか。住民の愛着が生まれれば、それがまちの宝になる。私が長くまちづくりのお手伝いをさせてもらっている名古屋市港区築地地区での取り組みを例にそんなまちづくりを紹介したい。



第4回ゆめランド祭りでの竹馬づくり。高齢者と子どもがふれあう(2005.3.20)。第5回では、スライムづくりや巨大シャボン玉づくりなども行われた(2006.3.19)。

身近な公園がまちの宝に

各地でワークショップ(W.S)方式による公園づくりが盛んである。スペースアでもいくつかのまちでそのお手伝いをさせてもらったが、その中で感じたことは、WSをやったからといって、必ずしもその結果としてできる公園が他にないユニークなものになるとは限らないが、WSに関わった住民にとっては、その公園が身近なものとなり、愛着を感じてもらえるということである。築地地区での公園づくりWSはその好例といえる。

築地地区では、地元のまちづくり組織(夢塾21)がタウンウォッチングなどに取り組む中でまちづくりに対する関心が高まり、具体的なまちづくりの第一弾として老朽化した公園の再整備の計画づくりに取り組んだ。行政としての再整備のタイミングと住民のニーズが一致し、住民と行政の連携により、四回のWSの中で計画をとりまとめた。さらに小学校の総合学習と連携した遊具選り、四百名もの地域住民が参加した絵タイルづくり、地元主催のオープニングイベントと地元発意によってその活動はどんどん広がりをみせた。再整備前までは、周辺の人々が利用する程度であった公園が、WSをきっかけとした取り組みによって、学区全体の公園として認知され、公園愛護会も学区全体の住民の参加によって作られ、草取りなどの維持管理のみならず、そこを拠点に様々な取り組みが行われている。

毎年三月に開催されている「ゆめランド祭り」はすでに五回を数えた。工作と遊びをテーマに毎回ユニークな企画が行われている。子どもがお年寄りから竹とんぼのつくり方を教わり、できた竹とんぼを誰が一番遠くまで飛ばせるかを競いあったり、手作りのストラックアウトでの競技など地域の子どもと大人が一緒に楽しんでいく。地域の人が顔見知りになる絶好の機会である。八月の木製プラントーづくり、九月のよせ植え講習会、十一月のよせ植え発表会もユニークだ。公園でプラントーを作り、それを自宅に持ち帰り飾ることで、地域を花一杯にすることを狙っている。

これらはすべて公園の再整備をきっかけとして進められた。ある地区では、「子どもが減って公園を利用する人なんていないので、公園なんかいらぬ」というような意見も聞かれたが、公園に対する愛着が生まれれば、みんながそこを使いなくなるのだ。

まちのやっかいものがまちの宝に

まちの中には過去の遺物として不要になったものがある。築地地区にある旧防潮壁もそうだった。新たに防潮壁が海側に作られた結果、その機能をなくし、老朽化した防潮壁は地区を分断するとともに景観上も問題となっていた。夢塾21が公園の再整備の次のテーマとして防潮壁をとりあげた時、取り壊せるものなら壊したいという意見も多かった。しかし、取り壊すのは難しいということと、その修景について、いろんなアイデアを出し合い、修景に関する提言をとりまとめた。

ここまでの話しはよくあるケースである。築地地区では提言したままでは実現が難しいことが判ると、自らの手でその実践に取り組んだのだ。緑区在住の画家にトリックアートを描いてもらったり、古い写真を集め、それをギャラリーのように展示したり、「みなと・夢ロード」という愛称を公募で決定し、防潮壁の歴史を記した銘板とともに設置したり…。中



3回目となった子ども達による絵。TVの取材も行われた(2006.2.7)。旧防潮壁の修景活動は平成17年度の名古屋市都市景観賞(まちづくり部門)を受賞した。

でも、特筆したいのは小学校の五・六年生に二年ごとに描いてもらっている「子ども達による絵」だ。美術を学んだ若者に描いてもらった下絵の上に子ども達も絵を描いた協働作品であり、子ども達がまちづくりと出会う場ともなっている。

こうした取り組みによって、それまでは地域を分断する壁としてしか見られていなかった防潮壁が地域を楽しくする空間に生まれかわり、愛着が生まれてくる。建物の更新に伴い、防潮壁を取り壊すこともできるという状況になってきたが、「取り壊さないでほしい」という声も聞かれている。まちのやっかいものが、まちの宝に生まれ変わったといえよう。

築地のまちづくりの展開

築地のまちづくりで興味深いのは、行政の思いに住民が答え、住民自らがいろいろな動きを作りだしていることである。その意味では「人」という宝があったからこそ、まちの中にあるありふれたものが「まちの宝」に生まれ変わったといってもよいだろう。また、夢塾21では世代交代をうまく進めた点も指摘したい。公園の再整備で中心メンバーだった人達は公園の完成とともに、公園愛護会の中心となり、夢塾21の塾長、事務局長は若い世代に受け継がれた。活動のマンネリ化を防ぐとともに、新たな人材を育成するしかけとして重要だ。



2006年8月、商店街の一角にオープンしたポートピア。環境整備協力金をいかに有効に活用し、まちづくりに結びつけるかが課題だ。

まちの様子は大きく変化してきている。市民に親しまれる港として、多くの来訪者が訪れる一方、かつて港区で一番の小売販売額があった商店街が衰退し、店舗数が減少している。このような中で、地区の将来像を明確にし、行政、住民、企業が共通の目標を持ち、連携しながらまちづくりをすすめていくための指針となるポートピア計画の見直し作業が進んでいる。十五年前に本計画が策定された際には、住民がこの計画策定に関わることにはなかったが、今回は意見交換会の開催など住民の意見を反映させるとともに、計画の実現に向け住民の果たす役割が重視されている。また実現に結びつけることのできる条件がある。それは住民の誘致活動によって実現したポートピアによる環境整備協力金である。

ポートピアの誘致にあたっては、風紀のみだれを心配する住民の反対運動もあったが、今のところ問題は起こっていない。環境整備協力金は、港まちの魅力づくり・にぎわいづくりを目指す事業、暮らしやすい地域づくりを目指す事業に活用することになっており、その用途を検討するため、港まちづくり協議会が設置された。これまで、やりたくてもお金がなくて断念してきたことが実現できる条件が整ったのだ。いかに地域住民の要望を組み入れながら、環境整備協力金を有効に活用していくか。築地のまちづくりは次の段階にはいったといえるだろう。